
恋の予感

海乃南月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の予感

【Nコード】

N3753A

【作者名】

海乃南月

【あらすじ】

オオツカチナツ

大塚千夏15歳は、新しい学校、新しい恋、新しい彼氏その3つの『新しい』が千夏をドキドキさせていた。名前順で隣の席の江馬祐輔は嫌な感じで、かっこよくなくて、いじわるで、でもどんどん千夏は祐輔に惹かれてく…

1：全ての始まり（前書き）

はじめまして海乃南月です どうぞ読んでやってください。

1：全ての始まり

あたしの家の周りには、ピンクで綺麗な桜の花びらが舞っていて、その先に見えるのは……。

「あれがこれからあたしが通う学校かあ！こっから見る限り広いけど……。実は狭かったりね……。カッコイイ人いるかなあ？」

そんなことを言いながらデレデレしてたのは、今日から高校1年生の、大塚千夏オオツカチナツだった。実は卒業式の前日に彼氏と

「高校が違うから」

という理由で別れた。だから、出会いのありそうなあの高校に行くのは楽しみなのだ。

「いろんな中学から男女集まってんだし……。かわいい子も、カッコイイ人もいるわけよ！」

そう言いながら笑っていた千夏だったが……

「千夏っ！もう時間なんじゃないの?!」

一階から聞こえるお母さんの声。

「何いってんのよ。お母さん！まだ七時じゃん……」

千夏は腕時計を見て、家の時計が壊れている事に気が付いた。

もう登校しなきゃいけない時間だった。

あゝもうっ！と怒りながら千夏は家から出た。

「家近くなきゃヤバかったよ」

あたしはそう言いながら走った。もう髪もボサボサで、こんなんじや出会いどころじゃないよ。

あたしは走って校門をくぐり、無事、入学式を終えた。

先生がまだ皆の名前を覚えていないから、席は名前順らしく、となりの人は江馬祐輔エマユウスケという人だった。イケメンじゃなくて、出会いな
んてあるわけないか…と心の中で呟いた。
祐輔って人はこっちをチラッと見て言った

「あんた…可愛くないね…」

さすがにこの言葉に力チンツときたあたしは

「あんたもね…」

と言い返してやった。

この一言が全ての始まり。なんてね…

2：優しい手

初登校、初高校、初授業

という言葉を書き歌にして歌ってるのはやっぱり千夏で。

「初ばかりだあゝ。それにしてもあの祐輔ってヤツ…失礼っ！」

千夏は入学式の時に可愛くないねと言われたことをまだ気にしていた。

「大塚……千……夏……？」

後ろで誰かが千夏を呼んだ。

「たっ…貴之っ！」

貴之とはあの元彼だ。

「久しぶりゝ あの日以来だな」

そう、あの日とは、貴之に千夏が振られたその日。

しばらく沈黙…何を言おうかと、考える二人。

そんな所に一人の男が来た。

「こんなところでいちやつかないでくださゝい。邪魔ですよゝ」

ふさげたように言ったのは祐輔だった。

一番見られたく相手に見られてしまったあゝと落ち込む千夏に優しく声をかけたのは…祐輔ではなく、貴之だった。

「俺達…やり直さねえ？」

千夏は、少しがっかりした。好きだったはずの貴之にやり直さねえ？と言われて、嬉しいはずなのに…。素直に喜べない。あたしは祐輔が助けてくれることを期待してたのかな……。

「やり直せば？」

と、祐輔はボソツと言ってから、見てみぬフリをしていつてしまった。

「やり直せるわけじゃないじゃん…振ったのは誰よ…」

千夏は貴之を睨んで言った。貴之の手を千夏はふりほどき、祐輔の頭をペシッと叩いた。

「つてえ……」

祐輔は、頭を擦りながら言った。

「見てみぬフリすんな」

あたしは祐輔に言つてやった。

「気になんないもん」

と、祐輔は言い返した。

「気になんないもん」

その言葉が大きく千夏の胸に響いた。鼻がつうんとする。

「気にして……」

あたしが涙目で言ったら、祐輔はコクンッと頷き、優しく手を握った。

3：祐輔なんて…好きだ

あれから…2日がたった。手を優しく握ってくれた、祐輔。すぐ放されたけど…凄く温かくて、祐輔の優しさを感じて。

あのとき涙が出た理由は分からないけど、祐輔がいなきゃあたしは…貴之とやり直してたのかな？

どうして…『貴之とやり直す』その道を選ばなかったのか、分からない。

やり直すのは無理だと、分かったのは…きっと、祐輔に会えたからかな？

まさか、祐輔をあたし…
なわけないか…

「つつ！千夏っ消ゴム貸してよ」

「は…はにっ！」

手を握られてから…あたしはなんか祐輔を意識し始めて…意識なんかしてるのは、あたしだけだろうけど…

「ありがと、後さ…」

祐輔はあたしに消ゴムを返しながら、何かを言いかけた。

「後さ…なに？」

あたしは、嫌な予感がしたので、祐輔に聞いてみた。

「腹空かねえ？」

祐輔はわざと話をそらした。こんな馬鹿っぽいこんなあたしでも分かるんだから…！一体何を隠してるの…？

「そうだ…ね」

あたしは無理に笑った。笑うってむずかしい…。

「熱…あるのか？元気ねえ…し」

祐輔はあたしの額に手をあてた。

この温かい手……あのときを思い出しちゃうよ。
わざと……なの？

祐輔……ずるいよ……。

「ないに決まってるじゃん……」

顔が熱くなってく……だめだよ……。

「千夏……熱……じゃ……」

気付かれた？！

「バカ……千夏っ。……熱じゃねえじゃん……」

祐輔はそつと手を放した。祐輔は……少し照れてた。
気付かれた……。あたしって分かりやすいのかな。

なに？分かりやすいって……何が？あたしは祐輔なんて、
好きだ。

『好きな人いる？』

ノートの隅に書いて、君の肩を軽く叩いた。君はあたしのノートを
見ると、クスツと笑った。

あたしはなんで笑ったのか全然分かんなかった。

祐輔は……ゆつくりとシャーペンで、祐輔のノートの隅に返事を書く。
返事が来るまで、体が震えていた。返事は……

『いるけど……』

いるんだ……。知りたいけど、怖くて聞けない。

『誰？』

3：祐輔なんて…好きだ（後書き）

もしこの作品を読んでくれる人がいるなら感激×3ぐらいですっ
！ありがとうございますm（　　）m

4：誤解*前編*

「…お前は？」

「はあ？」

「好きな人いんの？」

いるって言ったら、誰？って聞くに違いない。でも、嘘をつくのは…。

千夏は考えた。祐輔を好きだと言つか、祐輔に嘘をつくか。嘘をつくのは…あたしでも正直心が痛む…。

「いる…かも」

あたしの口からとっさに出た言葉がそれだった。

「かもっ…ってなんだよっ」

祐輔は笑いながら言った。一見落着…とあたしが思った、その時、祐輔はこう言った。

「誰？」

ほら…やっぱり聞いてきた…。

祐輔は知ってていつてんのかな、あたしが祐輔を好きだって知って…。

そう思うとからかわれてるみたいで、恥ずかしかった。

「ゆっ…」

あたしは‘ゆ’の一字しかいっていないのに、

「ああ、裕太かあ！！」

と祐輔に誤解されてしまった。

確かにゆが付くのは、裕太もそうだけど…。

なんか、テンションが下がったっていうか…ショックっていうか…。

裕太なんか好きなわけじゃないじゃない。

あたしは何度もココロの中で叫んだ。

裕太とは、岡田裕太で、クラスに一人はいる‘モテるヤツ’だ。女子からは、人気があるけど、男子からは嫌われている。もてるから。らしいけど…。

いくら裕太がもてるからって…あたしの好きな人が裕太なんて、酷いよ。

「あゝ気にすんなって、裕太が嫌われているから、いいにくかったんだろ？大丈夫だって」
違う違う違う…。

「全然っ違う」

そう言っであたしは、祐輔を睨んだ。でも、祐輔はあたしの気持ちなんて知らんぷりで。

「照れるなよ」。なあ、裕太」

祐輔は後ろを向いて言った。裕太は、‘岡田裕太’なので、すぐ後ろのれつなのだ。

なんか、凄く嫌な予感がした。

「裕太ゝ千夏が裕太を好きだって」

ガバッ

あたしは、祐輔の口を手で抑えた。
なにいつてんのよ、祐輔っ！

「馬鹿…」

あたしは祐輔を睨んで、呟いた。でも、もう遅かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3753a/>

恋の予感

2010年10月22日00時21分発行